

「価値観の多様性こそが捕鯨推進の原理」

朝日新聞「今日の論点」に反論

平成 18 年 7 月 24 日付けの朝日新聞の「今日の論点」において「日本のクジラ食文化」をテーマに日本鯨類研究所畑中理事長と長野大学佐藤教授の意見が掲載された。このうち佐藤教授の主張に対して本会の西村国際課長が朝日新聞に意見を投稿した。現時点で朝日の反応はないが、取りあえず大水 HP に西村課長の意見を掲載する。

■ 「価値観の多様性に配慮を」・佐藤教授論点

あたかもクジラだけが日本の食文化として特別扱いすることは疑問である。伝統漁法等、多様な地域文化の総体が日本の食文化である。

国際社会の中にはクジラが殺されることに耐え難い悲しみを覚える価値観が形成されており、(日本の)食文化論はそうした価値観の多様性や異文化への理解を欠いていた独善的なナショナリズムである。よって折り合いをつけ多様な文化の共存を目指すべきである。

■ 「価値観の多様性こそが捕鯨推進の原理」・西村課長意見

まずは本質論だけで純度の高い議論を展開されたことは高く評価できる。つまり反捕鯨の理由は「クジラが殺されるのは嫌だ」に尽きる。ただしそれでは通らないので様々な理屈を編み出しては体裁を整えているに過ぎない。この「クジラが殺されるのは嫌だ」を突きつけられた日本がいかなる態度を取るべきかということが議論の中心に据えられているが、このように本質論に立脚して日本の捕鯨推進を批判する主張は極めて稀である。

次に個々の議論であるが、「クジラは日本の食文化」という主張は「クジラは

日本人全員の食文化」という意味でもなければ「クジラだけが日本の食文化」という意味でもない。「クジラは日本の食文化の一つ」という意味に過ぎない。その意味では伝統漁法を含む他の文化も全く同様に日本の文化である。ただしクジラをことさら取り上げなければならないのは、「資源が十分にある限り利用する」という他の食文化で認められている原則がクジラ食文化のみ認められていないからに他ならない。なんら攻撃にさらされていない他の食文化を取り上げて「日本の文化」と叫ぶのは自由である。ただし攻撃されていないものは擁護の必要性もないだけの話だ。

それよりもクジラは国民的文化ではないから支持すべきではないとする反捕鯨団体の主張の方が違和感を覚える。後継者が少ない伝統芸能をわざわざ無形文化財として祭り上げて後世に残そうとする努力がある中で、マイナーなものは文化ではないとする考え方自体に疑問を感じる。そのような考え方に立てば、大衆受けせず先細りしていく伝統文化を保存する取り組みには政府が関与してはならないということになる。他方、反捕鯨国のフランスも、自国のグルメのフォアグラが動物愛護運動の攻撃を受けるとさっさと国の文化遺産に指定してしまったが、国民全員がフォアグラ好きでもあるまい。佐藤氏が独善的なナショナリズムとされる日本の姿勢と何ら変わりはないことがよく分かる。ちなみにフォアグラのガチョウはクジラのように野生生活を満喫することもなく、無理やり餌を流し込まれ最後は皆殺される運命にある。

何よりも驚いたのは捕鯨推進に対する批判として「価値観の多様性」という主張が飛び出したことである。「価値観の多様性」を尊重すべきであるからこそ、他から強制されることなく、食べたい人が食べたいものを食べ、食べたくない

人は食わず、見たくない人は見ないという世の中にしていかななくてはならない。自分の目の前で起こっているわけでもなければ、殺人のように万人が認める犯罪行為でもないにも関わらず、この世のどこかで行われていることが気に入らないとして、力づくで止めさせる行為は、「価値観の多様性」とは正反対の「全体主義」に他ならない。

日本人は他に食べ物がいくらでもあるからクジラぐらいあきらめろという議論がある。他に食べ物があっても譲れないものこそが、まさに他人に迷惑を掛けない限り認められるべき文化的自由である。言い換えれば「多様な価値観」を持ち続ける自由のために関係者はここまで努力してきたのである。欧米にはヌーディストビーチがあるが、イスラム原理主義者は女性を全身布で覆い隠そうとする。それぞれが好きなようにやればよくて、この世のどこかにそのような文化があることが許されないと出かけて行って反対するから戦争になる。世界中に同じ戒律を押し付けることに我々は反対しているだけで、彼らのいかなる文化的自由にも踏み入るつもりはない。異文化との共存ならやり様もあるが、全体主義と共存せよと言われても頭を抱えてしまう。「不毛な対立」は早く終わらせたい。是非その魔法を伝授していただきたいものだ。